奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句
令和二年十二月度　入選句（投稿総数二千四百九十二句・一般投句数五百七十六句）

選者　名和永山

特選

産声にわが頬の濡る冬温し　大垣市　上嶋水樂

お子さんが産まれたのであろう。赤ちゃんの産声に思わず「涙」が溢れ出た。誰しもわが子の誕生には、感動しうれしさがこみ上げる。「産声にわが頬の濡る」この状況に「冬温し」の季語が生きている。この温かさは、自分の心の感動と同時に「赤子の温かみ」が伝わってくる。季語が活かされた句である。

お子さんのお誕生、おめでとうございます。お子さんが大きくなられたら「パパ、君の生まれた時にこんな句を詠んだよ！」と・・・。お子さんも、俳句づくりに参加してくれるかな。

夕暮れに吹かれてみれば風は秋　不破郡垂井町　中嶋結映

一見、報告句のように読み取れる。「～してみれば」からは、たしかに「因果関係」を説明しているようにも捉えることが出来る。しかし、あえて「夕暮れの風に吹かれてみようとした」作者の気持ちが伝わる。今日という日が暮れていく。その時に、「風に吹かれたい」と思った詠者の心境をうかがい知ることが出来るであろう。（こんなことを思うのは、若き乙女だと思うのだが）

読者（鑑賞する側）は、何があったのだ。と詠者の心境を知りたくなる。詠者は「風は秋」と、はっきりした「発見」で、完結させている。決して「秋の風」ではないのだ。その風に気持ちも、すっきりしたのではないだろうか。

掬うたび光こぼれる今年米　大垣市　大杉すみゑ

収穫を終えた「今年米」。籾摺りをした米は鮮やかな光を放つ。その光りは、太陽の恵みであり、お百姓の結晶の光りである。

「米」は、八十八（漢字の組み立て）の手間がかかると言われる。一番は「天候」。その時期に合った気温が必要だし、稲の花が見られる頃には台風もやってくる。二番に「水」の管理である。いつまでも田に水を残して置いてはいけない。実の入る時には、水を落とす。もちろん田の草取りも必要である。収穫し籾摺りをした一粒一粒の米の光りは、こうした汗の結晶である。

掬うお米に感謝し、その光りに今までの苦労を忘れる時なのである。

秀逸

綻びをゆるりと修す雁の棹　岐阜市　堀江美州

障子貼る明るきあすがあるやうに　揖斐郡大野町　藤田涼子

千歳飴蹴りつつ歩く小さき足袋　大垣市　辻シゲ

親に似た身のあちこちや足の跣　大垣市　宮上美濃留

冬帝に勝負挑まず寝酒かな　東京都狛江市　椎野一恵

吊り橋の揺れれば揺るる紅葉山　大垣市　新町恵子

首塚の古りし碑文や秋のこゑ　養老郡養老町　田中紫香

祈祷にも飴の気になる七五三祝　兵庫県豊岡市　辻井一路

着物には長き参道七五三　本巣市　土川楽人

曼珠沙華蕊七本の導火線　埼玉県さいたま市　短夜の月

入選

雅楽の音白無垢映えし秋の空　大垣市　米山　春江

歳事記に拾いて挟む散落葉　本巣郡北方町　三輪　幸惠

名水で研ぎし新米炊き上がる　福井県敦賀市　山田　美千代

人の輪の膨れてどんど火の粉舞ふ　不破郡垂井町　安田　栄女

黄落や芳名簿に筆掠れつつ　不破郡垂井町　小坂　久美子

蜜柑剥く放物線に飛ぶ果汁　不破郡垂井町　北村　廣美

カレンダー残る一枚枯木立ち　岐阜市　船渡　惠

万葉の風を誘ふやこぼれ荻　大垣市　河合　栄雲

掃けば逃げ婆もて遊ぶ枯落葉　大垣市　大角　信華

干大根たしかめてゆく風のおと　大垣市　佐藤　すみ子

入選

初鴨の影さはやかに結びの地　大垣市　神野　武彦

どの橋も城へつながる星月夜　大垣市　森川　きよ子

夜来雨やむやセピアの冬の朝　大垣市　立川　昌子

繰り返す昭和の話おでん酒　兵庫県神戸市　岸下　庄二

行く年や訛り肴に盃重ね　愛知県瀬戸市　宮崎　諭志

きのふより川幅狭き冬の川　大垣市　髙橋　柳邦

枇杷もぐや真青の空のなほ蒼く　愛知県尾張旭市　小野　薫

霜月や野菜間引きて紫煙吐く　本巣市　土川　楽人

嘘して鬼に見つかるかくれんぼ　三重県四日市　藤田　勝民

一斉にビルの灯ともす秋落暉　神奈川県横浜市　龍野　ひろし

選者吟

田作りにまづ箸伸ぶる長子かな　永山